

ブラウニングの“Rabbi Ben Ezra”と アーノルドの“Growing Old”

吉門 牧雄

(人文学部人文学科)

Browning's “Rabbi Ben Ezra” and Arnold's “Growing Old”

Makio YOSHIKADO

Faculty of Humanities

ロバート・ブラウニング (Robert Browning) の「ラビ・ベン・エズラ」(“Rabbi Ben Ezra”) は『劇的登場人物』(*Dramatis Personae*, 1864) の中に、「アプト・ヴォーグラー」(“Abt Vogler”) や「荒野の死」(“A Death in the Desert”) と共に収められている。¹ この詩は中世ユダヤの碩学アブラハム・ベン・メイル・イブン・エズラ (Abraham ben Meir Ibn Ezra) の独白という形で書かれたものであるが、ブラウニング自身の人生観・宗教観を大きく反映した作品として知られ、特にその老年賛美のゆえに有名である。ベン・エズラの独白は次のような呼びかけで始まる。

I

Grow old along with me!
The best is yet to be,
The last of life, for which the first was made:
Our times are in His hand
Who saith ‘A whole I planned,
‘Youth shows but half; trust God: see all nor be afraid!’ (1-6)

我と共に老いゆけよ！

最善はこれからだ。

人生の最期、そのために最初が作られたのだ。

我らの時は神の聖手の中にある。

神は言われる、「私は一つの全体を計画した。

青春はその半ばを示すのみ、神に信頼せよ。全てを見て恐れるな！」と。

ここでブラウニングは人生の最期である老年こそ人間の魂が十分に円熟する最良の時であり、青年期はそのための準備期間であると主張する。神は人間の一生を一つの全体として計画したのであるから、その半ばである青年期がたとえ不遇であろうとも「全てを見て恐れるな！」と激励している。人間の一般的感情としてはいつまでも若さを保ちたいと思うのが当然であり、人間は本能的に老い

を恐れるものである。老いは人間存在の有限性を自覚させ、死を予感させるからである。ところが、ブラウニングはそれを逆手に取って「我と共に老いゆけよ！」と語るのである。

このように極めて楽観的な老年賛美に対して真向から反論し、老年とは決してそのように生易しいものではないと反論した詩人がいた。マシュー・アーノルド (Matthew Arnold) である。彼が「ラビ・ベン・エズラ」への応答として書いたのは「老いゆく」("Growing Old") という詩であるが、² 短いものであるのでその全体を下に引用する。³

What is it to grow old?
Is it to lose the glory of the form,
The lustre of the eye?
Is it for beauty to forgo her wreath?
—Yes, but not this alone.

Is it to feel our strength—
Not our bloom only, but our strength—decay?
Is it to feel each limb
Grow stiffer, every function less exact,
Each nerve more loosely strung?

Yes, this, and more; but not
Ah, 'tis not what in youth we dreamed 'twould be!
'Tis not to have our life
Mellowed and softened as with sunset-glow,
A golden day's decline.

'Tis not to see the world
As from a height, with rapt prophetic eyes,
And heart profoundly stirred;
And weep, and feel the fullness of the past,
The years that are no more.

It is to spend long days
And not once feel that we were ever young;
It is to add, immured
In the hot prison of the present, month
To month with weary pain.

It is to suffer this,
And feel but half, and feebly, what we feel.
Deep in our hidden heart
Festers the dull remembrance of a change,
But no emotion—none.

It is —last stage of all—
When we are frozen up within, and quite
The phantom of ourselves,
To hear the world applaud the hollow ghost
Which blamed the living man.

老いゆくとは何か。
それは姿態の栄光を、目の輝きを失うことではないのか。
それは美がその花輪を捨てることではないのか。
その通りだ。しかし、これだけではない。

それは我らの力が、我らの花ばかりでなく、我らの力が朽ちていくのを感じることで
はないのか。
それは各々の肢体がより堅くなり、全ての機能が正確さを欠き、全ての神経が弛んで
いくのを感じることではないのか。

その通り、このことだ、だがさらにある。
しかし、ああ、それは我々が若い時に夢見ていた姿ではない。
それは黄金の日の傾きである夕日の輝きに伴うかのように、我々の人生が熟し、柔ら
かくなっていくことではない。

それはうっとりとした予言者の目をして、深く心をかき立て、高みから世界を眺める
ことではない。そして、泣いて過去の、もはや存在しない年月の充実を感じることで
はない。

それは長い日々を過ごすことであり、我々がかつて若かったことを一度も感じないこ
とである。
それは現在という牢獄に幽閉されて、疲れた痛みをもって月に月を加えることである。

それはこれを苦しむことであり、
彼らの感じていることを半分しか、それも弱々しくしか感じないことである。我々の
隠された心に深く変化についての鈍い記憶がうずいているが、感情は無い——何も無
い。

それは全ての最終段階であり、我々が内面に凍りつき、そして、まったく我々自身の
幻影となったとき、生きている人間を非難するうつろな亡霊に世間が拍手かっさいす
るのを聴くことである。

この詩を読むとその憂愁に満ちた悲観的な老年期が「ラビ・ベン・エズラ」の強健で確信的な響きと極立った対照をなしていることに容易に気づくだろう。ベン・エズラの独白が命令形で始まっているのに対して、「老いゆく」の方は疑問文で始まっているので、老いについていろいろと思いを巡らしているのかと思いきや、それは老年のマイナス面をより際立たせるレトリックなのである。

「老いゆくとは何か。それは姿態の栄光を、目の輝きを失うことではないのか。」という問いに対して、アーノルドはためらうことなく、「その通りだ。しかし、これだけではない。」と断言する。アーノルドにとって老年は決して円熟期などではなく、その力が衰え、若かった時の記憶すら忘れ、感情さえ消去してうつろな亡霊と成り果ててしまうことなのである。ライオネル・トリリング (Lionel Trilling) も言うように、ここには「きっぱりとした響き、いやさらに棄却の響きすら」(“A note of finality, even of dismissal”) 感じられ、アーノルドの老年期に対するほとんど絶望に近い気持ちを読み取れる。⁴

また二つの詩の韻律を比較してみると、「ラビ・ベン・エズラ」の各連が三歩格の対句 (couplet) の後に五歩格と六歩格の詩行をそれぞれ加えた六行連で、aabccb と脚韻を踏むという大変工夫を凝らしたものになっているのに対し、「老いゆく」の方は三歩格と四歩格とが交互に並んだ五行連であり、脚韻は踏んでいない。この点について、コンラッド・バリエット (Conrad Balliet) は、「脚韻の欠如は、ブラウニングの押韻の楽観主義と極立った対照をなす物悲しい気分を強調している。」(“The lack of rhyme emphasizes the mood of desolation that contrasts so sharply with Browning's rhyming optimism....”) と指摘しているが、アーノルドの詩の悲観的な印象は韻律からも伺えるのである。⁵

このように二つの詩を比較してみると、老年に対するブラウニングとアーノルドの見解が肯定と否定との両極に位置しているのが、この所だけで判断すると二人が対立関係にあるかのように思いがちだが、そう断定してしまうのは余りに短絡的であろう。実は二人は互いに仲の良い友人であった。二人の友好関係を示すエピソードとして有名なのはアーノルドの劇詩「エトナ山上のエンペドクレス」(“Empedocles on Etna,” 以下「エンペドクレス」) に係わることであった。この詩は初め『エトナ山上のエンペドクレスと他の詩』(*Empedocles on Etna, and Other Poems*) という詩集の中で1852年に発表されたのであるが、1853年に彼の最も良い詩を集めた『詩集、新版』(*Poems, A New Edition*) にはそれを載せなかった。しかし、彼はその後1867年の『新詩集』(*New Poems*) の中に再びこの詩を編入している。その理由についてアーノルドは脚注に「この詩が興味を引くという栄誉と幸運を得た天才であるロバート・ブラウニング氏の懇請によって」(“at the request of a man of genius, whom it had the honour and the good fortune to interest, —Mr. Robert Browning.”) 載せることにしたと明言している。⁶

そもそも「エンペドクレス」を1853年の『詩集』に入れなかった理由について、アーノルドはその序文に、「苦しみは行為の中にはけ口を見い出さない。絶え間ない精神的苦悩の状態は長びかされ、事件や希望や反抗によって和らげられない。全てが耐えられ、何も為されない」(“the suffering finds no vent in action; in which a continuous state of mental distress is prolonged, unrelieved by incident, hope, or resistance; in which there is everything to be endured, nothing to be done....”) からだと述べている。⁷

この詩の中に医者ポーセイニアスが登場するが、彼はエンペドクレスが三十日間の仮死状態から蘇らせたパンティアという女について彼の口からその奇跡の秘密を聞こうとしてエトナ山に登る。また、エンペドクレスの魅力に惹かれているカリクレスという青年はハーブを弾いて彼の苦悩を慰めようとする。だが、自分に役立つと思われるエンペドクレスのカリスマ的魔法を知ろうとするポーセイニアスの努力も、ギリシアの神話によせてハーブに合わせて歌を歌うカリクレスの努力も、人生に疲れ切ったエンペドクレスに再び生きる勇気を与えるには至らず全て水泡に帰してしまう。そしてついに彼は、

Before the soul lose all her solemn joys,

And awe be dead, and hope impossible,
 And the soul's deep eternal night come on—
 Receive me, hide me, quench me, take me home!
 (Act II, 33—36)

魂がその厳かな喜びを失う前に、
 畏敬の念が死に絶え、希望がありえなくなる前に、
 魂の深い永遠の夜がやってくる前に、
 私を受け入れ、隠し、和らげ、私を故郷に帰してくれ！

と四大 (“the elements”) に語って、エトナ山の火口の縁に上り、火口に身を投げて自らの生命を絶つ。この筋書きを見ると確かにエンペドクレスを悲劇的結末に追い込む敵対者が劇中に存在する訳でもなく、また彼が現状を打ち破ろうとして積極的に運命に抵抗する訳でもない。それゆえ、苦悩のはけ口が無いというアーノルドの説明はもっともと頷けるものである。

こういった点を考慮に入れると、アーノルド自身が余りにも悲観的であるとして退けた「エンペドクレス」の再掲載を何故ブラウニングが勧めたのか、という疑問が湧いてくる。それを考える上で大きな手掛かりとなるのはブラウニングがイサ・ブラッグデン (Isa Blagden) に宛てた1867年7月19日付けの手紙である。その中で彼は、「ところで、ちょうど発刊されたマット・アーノルドの新しい詩の中に、それが引込まれるべきではないという私の願いによってそれを為すという脚注を付けて、『エンペドクレス』を再編入したと、彼は私に話してくれた。私はそのことがほんとうにうれしい。」 (“By the way, in the new poems of Mat Arnold just coming out, he has re-placed ‘Empedocles,’ he tells me, with a note saying it is all through my desire it should not be withdrawn: I am really flattered by that.”) と述べ、また翌月8月19日付けの手紙にもほぼ同様のことを書いた後で、「私は彼の詩と同様に彼という人物が好きなのだ。」 (“I like the man as much as his poems.”) と付け加えている。⁸ ここには、アーノルドが自分の意味を受け入れて「エンペドクレス」を『新詩集』の中に載せ、しかもそれが彼の懇請によることを脚注に記してくれたことに対するブラウニングの素直な喜びが汲み取れる。またブラッグデンに宛てた他の手紙の中には「エンペドクレス」からの多くの引用が見受けられる。マイジー・ワード (Maisie Ward) も述べているように、「彼がアーノルドに言及する時はいつも感嘆と共に愛情をもって言及しているのである。」 (“...whenever he mentioned Arnold it was with affection as well as admiration.”)⁹ それゆえ、ブラウニングは「エンペドクレス」が率直に言って好きであった、また、そこに共鳴するものがあったと考える方が自然であると思う。

「エンペドクレス」を読んでみると、確かにそこには憂鬱と倦怠感が満ちてはいるが、その根底にあるのは真剣な苦悩であり、宇宙の真理への憧れである。そこには一種崇高な精神の輝きがある。一方、ブラウニングはなるほど「ラビ・ベン・エズラ」の中で老年期のすばらしさを強調したが、それと共に彼は疾風怒涛の青年期における大きな憧れや不安、また疑いの心をも肯定している。

III

Not for such hopes and fears
 Annulling youth's brief years,
 Do I remonstrate: folly wide the mark!
 Rather I prize the doubt
 (13—16)

かかる希望や恐れのために青春の短い年月を無効にはしないとすれば、私は抗議する。
 愚かな、とんだ見当違いだと！
 むしろ私は疑いを尊重する。

また、エンペドクレスが死に臨んで叫ぶ、「ああ、この山のように赤々と燃えてみたい。」(“Oh, that I could glow like this mountain!” l. 323) という言葉は、「出来上がったそれきりの土塊は火花に騒ぎもしない。」(“Finished and finite clods, untroubled by a spark.” l. 18) というベン・エズラの声を思い起こさせる。そこには神の火花に燃やされたいという強烈な魂の願いがある。エンペドクレスは常に真なるもの、また、永遠の喜びを得ようと努力するが得られず苦悩しているのである。そしてついに、彼は「魂が萎れる前に、失望と暗闇の霧が魂の上に再び襲いかかる前に、私を受け入れ、救い給え！」(“Ere it [=soul] flag, ere the mists/Of despondency and gloom/Rush over it again,/Receieve me, save me! ll. 413-16) と叫んで火口の中に身を投じるのである。

エンペドクレスの味わったこのような苦悩はブラウニングには無関係と思われがちだが、「ラビ・ベン・エズラ」を書いた時の彼は同様の苦悩の中にあつた。彼が「ラビ・ベン・エズラ」を書き上げたのは1862年頃であるが、¹⁰ その直前の1861年6月29日に彼は最愛の妻エリザベス・バレット(Elizabeth Barrett)を亡くしている。長く無名の詩人であつた彼の才能を誰よりも高く評価して彼を励まし続けたのは他ならぬエリザベスであつた。その妻を失つた時のブラウニングの打撃はほとんど絶望に近いものであつた。失意のブラウニングはその年の8月に当時住んでいたフローレンスを離れ帰国し、再びその地に戻ることはなかつた。そのような状況の中で「ラビ・ベン・エズラ」は書かれたのであるが、その時のブラウニングの心境をウィリアム・アーヴィン(William Irvine)はこう記している。「『ラビ・ベン・エズラ』は1862年、深い喪失感に呻いていた詩人が可能なものの全てを肯定する必要のあつた荒涼たる時に完成されたものである。エリザベスが死んで一年後、何かを肯定するには勇気が必要であつた。ましてや忌むべき孤独と芸術的力量的衰退が自ら絶えず予想される老年を肯定することは勇気のいることであつた。」(“...‘Rabbi Ben Ezra’ was completed in the bleak year of 1862 when a deeply bereaved poet needed to affirm everything he could. A year after Elizabeth’s death, it took some courage to affirm anything, let alone old age with its personally haunting prospect of uncongenial solitude and artistic decline.”)¹¹

確かに1862年と言えばブラウニングがちょうど50歳の時であり、彼自身やはり夫人を失つた寂寥感と老年への不安を味わつていたと思う。ブラウニングが一般に認められ始めたのは1864年、『劇的登場人物』が出てからであり、彼の詩集の再版が出たのはこの作品が初めてなのであるから、彼の心の中には一生無名のまま終わるのではないかという挫折感もあつたであろう。つまり、ブラウニングは「老いゆく」の中で語られた老年期のマイナス面をも十分に実感してははずである。ブラウニングの詩には肯定的、楽観的要素が多いのは事実だが、だからと言って人生の苦しみや世の邪悪に目を塞いだ訳ではなかつた。

それと同様に、アーノルドの「老いゆく」が極めて、悲観的であるからと言って、彼がいつも人生を悲観してたと考えるのは良くない。なるほど彼は「老いゆく」が発表された1867年ごろには詩的靈感の泉を枯らしかけており、それ以降はほとんど詩を書かなかつたが、今度は批評家としてますます知られるようになった。彼の批評のモットウは公平無私な心(“disinterestedness”)をもって「対象を本来それがあつたままの姿に見ること」(“to see the object as in itself it really is.”)であつた。¹² そのような彼がこの悪しき時代にあつて自分の心を支えてくれる三人の人を「ある友人へ」(“To a Friend”)という詩の中で挙げてゐるが、それはホメロス、エピクテトス、そしてソポクレスである。三人の中でも特に感謝を捧げたいのは「よく均衡のとれた魂」(“even-balanced soul”)

を持つソポクレスに対してであった。ソポクレスはどんな時にも心の平静を失わず、「人生を着実に見、また人生を全体として見た」（“who saw life steadily, and saw it whole,” 1. 12）理想の人であった。このようにアーノルドも人生をその時その時の細切れとしてではなく、全体として一つの一貫したものとして見ることを理想としているのである。これは「ラビ・ベン・エズラ」の「私は一つの全体を計画した。」という言葉と相通じるものがある。ジョン・ヒートナー（John Hitner）は、人生を全体として見るソポクレスの態度がまさにブラウニングの目標とするところであると言っているが、まったく同一であるかは疑問の余地はあるとしても、それらが極めて類似したものであることは確かであろう。¹³

このように考察してみると、「ラビ・ベン・エズラ」と「老いゆく」との表面的な対照性にもかかわらず、ブラウニングとアーノルドには多くの共通点があることが明らかとなって来た。しかし、今度は逆にそのような共通点にもかかわらず何故老年期に対してこれほど異なる見解を二人が持つに至ったのだろうか。それを解く鍵は‘progress’というものをどう捉えるかにあるような気がする。そこで次にアーノルドの「老いゆく」と共に発表され、それと極めて深い関係のある“The Progress of Poesy”を分析してみよう。この詩を読むとアーノルドが抱いていた青年期、壮年期に対する考え方がよく理解できる。

Youth rambles on life's arid mount,
And strikes the rock, and finds the vein,
And brings the water from the fount,
The fount which shall not flow again.

The man mature with labour chops
For the bright stream a channel grand,
And sees not that the sacred drops
Ran off and vanished out of hand.

And then the old man totters nigh,
And feebly rakes among the stones.
The mount is mute, the channel dry;
And down he lays his weary bones.

若者は人生の不毛の丘をぶらつき、
岩を打ち、水脈を見つけ、そして、泉から水を引く。
再び流れることはないであろう泉から。

労苦で成熟した熟年の者は光輝く流れを求めて河床を切り開く。
だが、聖なるしずくが流れ出て手から消え去ったことが解らない。

それから老人は近所をよろめき、
弱々しく石の間をくまなく探す。
丘は音なく、河床は乾いている。
そして、彼は疲れた骨を横たえる。

ここで言う泉 (“fount”) とは狭義には詩的靈感の泉であり、広義には生命あるいは活力の泉を意味すると思われる。アーノルドはここで人生の絶頂期は青年期であり、後は急速に下降線を辿り、老年期に入って生命の泉はすっかり干上がってしまう、と考えているようである。それにもかかわらず、この詩のタイトルが “The Progress of Poesy” であるのは少し妙な感じであるが、‘progress’ という言葉には「進歩」「発達」という意味の他に「成行き」「推移」という意味もあるので、この場合は後者の方を取って、「詩歌の成行き」と訳すべきものであろう。成行きとは明らかに衰退である。

これに対して、ブラウニングの ‘progress’ の捉え方は常に未来指向的なものであった。「荒野の死」の中にも ‘progress’こそ人間の人間たる由縁であるという老ヨハネの独白がある。

...progress, man's distinctive mark alone,
Not God's, and not the beasts': God is, they are.
Man partly is and wholly hopes to be.

(586-88)

進歩、それは人間だけの特徴、
神のものでなく、獣のものでない。
神はあり、獣もある。
人間は部分的にあり、全くあろうと希望している。

人間が神や獣と違う点は、人間が未完成な状態にありながらも完き姿を目指して進歩しようと奮闘していることである。これはまさにブラウニングが生涯一貫して持っていた未完成の哲学の表明である。¹⁴ 「アプト・ヴォーグラー」には「地上にてはこわれた円弧、天にては完き円周」 (“On the earth the broken arcs; in the heaven, a perfect round.” l. 72) とあるが、天への仮入学たる地上においては未完成であることこそ尊いのである。なぜなら出来上がったものは進歩への憧れを失い靈感の火花を消してしまうゆえにただの土塊と化してしまうからである。

「ラビ・ベン・エズラ」においても、「最善はこれからだ」という言葉はまさにブラウニングの未来指向性を示している。また、人間は地上の戦いを終えた後、「芽ばえながら一つの神」 (“a god in the germ” l. 78) として、すなわち、一個の霊的存在として天に行くのだと語っている。「芽ばえ」と言うからには当然それが大きく成長することが期待されている。すなわち、人間は来世においてもなお永遠に進歩し続けるものだという思想の表れである。このような思想を彼が持ち得るのも、人間という土塊を一つの作品として形造った神は人間を再創造する愛と力を有するとのブラウニングの信頼のゆえであろう。

以上のような考察から、先に述べたブラウニングとアーノルドの共通点にもかかわらず「ラビ・ベン・エズラ」と「老いゆく」において二人の老年観が著しく異なる理由の一つは ‘progress’ というものの捉え方の違いにあると思われる。最善を過去に置くか未来に置くかによって老年期の意義は大きく違ってくるのである。

注

- 1 本論ではブラウニングの詩のテキストとして、Ian Jack ed., *Browning: Poetical Works 1833-1864* (London: Oxford UP, 1970) を使用した。
- 2 この点については、William Clyde DeVane, *A Browning Handbook* (New York: Appleton-Century-Crofts, 1955) 295参照。ここでデヴィエインは、“If it [= ‘Rabbi Ben Ezra’] answers FitzGerald’s *Omar*, as I

think, it is possibly answered itself by Matthew Arnold's Poem, *Growing Old*, published in 1867.”と述べている。

- 3 アーノルドの詩のテキストとして, Kenneth Allott and Miriam Allott ed., *The Poems of Matthew Arnold* (London: Longman, 1979) を使用した。
- 4 Lionel Trilling, *Matthew Arnold* (London: George Allen & Unwin Ltd., 1939) 293.
- 5 Conrad A. Balliet, “‘Growing Old’ Along With ‘Rabbi Ben Ezra,’” *Victorian Poetry* 1(1963): 301.
- 6 C. B. Tinker and H. F. Lowry, *The Poetry of Matthew Arnold* (London: Oxford UP, 1940) 286.
- 7 Miriam Allott and Robert H. Super ed., *The Oxford Authors: Matthew Arnold* (Oxford: Oxford UP, 1986) 173.
- 8 Edward C. McAleer ed., *Dearest Isa: Robert Browning's Letters to Isabella Blagden* (Austin: U of Texas P, 1977) 274, 278.
- 9 Maisie Ward, *Robert Browning and His World: Two Robert Brownings?* [1861-1889] (New York: Holt, Rinehart and Winston, 1969) 115.
- 10 DeVane, *A Browning Handbook*, 293 参照。「ラビ・ベン・エズラ」の執筆年代について彼は, “It is not possible to say exactly when *Rabbi Ben Ezra* was written, though the probability is that it was not completed before 1862.” という見解を述べている。
- 11 William Irvine and Park Honan, *The Book, the Ring, and the Poet: A biography of Robert Browning* (London: The Bodley Head, 1974) 399.
- 12 Allott and Super, 326, 317.
- 13 John Meigs Hitner, *Browning's Analysis of a Murder: A case for The Inn Album* (Michigan: Northern Michigan UP, 1969) 104.
- 14 William Clyde DeVane, *Browning's Parleyings: The Autobiography Of A Mind* (New Haven: Yale UP, 1927) 238参照。ここでデイヴェインは, “As he [=Browning] grew older one idea grew more and more fixed in his mind, and the necessity for insisting upon it more and more vital. It was the idea of progress in all human things.” と指摘している。

平成5年(1993)9月30日受理

平成5年(1993)12月27日発行

